

「言語研究センター」改革への提言

倉田 清

「言語研究センター」が開設されてから数年を経たが、言語研究の諸分野での積極的な活動がほとんどなされていないという感が強い。根本的と思われる若干の改革問題について愚見を述べさせて頂きたい。

1) 「言語研究センター」の業務の変革を行うことがまず必要ではないか。センターの業務は〈言語研究〉関係と〈語学授業〉関係の二本立てであるが、後者の業務が主になっているのが現状ではないか。センターの名の下にあるのは、正に本来的な言語研究であって語学の授業ではない。語学授業関係の業務はセンターから分離独立されるべきではないか。

2) 言語研究の多様性を克服して所員の学問的連帯を創り上げるために、所員のセンターへの所属意識を確認すべきではないか。所員の所属意識の希薄さは過去数回の総会への出席者数を見ても明かであるが、センターは改めて所員登録を実施して各所員に研究分野、研究題目などかなり詳細に問い、さらに研究成果の発表ないし刊行の計画予定などについても確認することによって、真に研究意欲のある所員の活動の場を提供することにはどうであろうか。

3) 所員の研究分野は多種多様な研究テーマがあるはずである。勿論日本語を含めて音韻論、音声学、意味論から形態論、ソシュールの一般言語学と記号学、ヤコブソンの音韻学、トルベッコイ、チョムスキーの生成文法、ウィットゲンシュタイン、ウィズダム、カルナップなどの言語分析、オースティン、ライル、ストローソン、ウィットゲンシュタインらの日常言語学、デカルト、パスカルからベルクソンに到る言語と哲学、レヴィ＝ストロースの構造主義、ロラン・バルト、クリステヴァなど枚挙にいとまない。

語学研究では、英語教育の研究は勿論ではあるが、ことに所員の専門語の語学（文法）研究、あるいは、ラテン系、ゲルマン系、スラヴ系言語の比較研究は共同研究も割合容易で、これなどはセ

ンターにとって重要な活動になると考える。

さらに、現センターの山口建治所長の言にもあったが、まず、文学、哲学、社会学などと言語との関わりにより広範な領域に広げることができるのではないか。すぐ考えられるのは、作家、ことに小説家の文体研究であろう。現代ならば、ドストエフスキーやトルストイ、ヘッセやトマス・マン、ドイツ表現主義作家の文体、ベルクソンの意識と持続をめぐるニーチェ、ペギー、クロードの文体、意識の流れの文学のプルースト、ジョイスの文体、ロストジェネレーションのドス＝パソス、ヘミングウェイの映画的・ドキュメンタリー・タッチの文体、そして、フォークナー。ヌーヴォー・ロマンの文体。モーリヤックとグレアム・グリーンなど、これも枚挙にいとまないが、文学研究者が多いセンター所員の活動の場となろう。共同研究グループの結成も容易であろう。

4) 「紀要」について一言。紀要の刊行を年二回ないし三回にしてはどうであろうか。原稿の規定枚数が少ないので、年一回では続編があっても一年待たざるをえない。以前、「フランス語動詞の条件法と接続法の古典的・現代的用法について」掲載させていただいたが、結局二つに分けて二年がかりの発表となり、条件法と接続法の内的関連が途切れてしまった。また、紀要の版も人文研究所と同じにしてはどうか。版面が小さいので、私の場合、引用した多くのフランス語文が行変えが多く、緻密な内容がより難解なものになりかねなかった。年四回刊行される「人文研究」や他の外部の専門誌に掲載することになる。

センターの活動は、「紀要」に掲載された論文によって具体的に表され、評価される。

5) 共同研究グループの結成について。以上思いつくままに挙げた研究分野とテーマよりさらに多くのものが当然あると思うが、各所員がそれぞれの研究分野を深めるとともに、その個人研究を基礎とした上で、共通テーマを選択し、相互に自由な立場で協力しあうために、共同研究グループを

つくる必要があるのではないか。所員相互の学問的連帯性を深める一つの良い手立てであると思う。

（私がかつて人文学研究所長になったとき、現在の言語センターと似通った状態であったが、所員の所属意識を確認し、まず七つの共同研究グ

ループをつくり、「叢書」を刊行した。その後研究グループの数は増え、今日に到っている。また、市民講座、県民講座も開始し、現在では神奈川大学の対社会的活動として全学的に定着していることを付言する。）